

「いかに大きなものを喰ったか」というホラを競い合う村人たちがいた。

ある者は「家」を喰ったと言い、ある者は「山」を喰ったと言い、ある者は「海」を喰ったと言い。

ホラはしだいに大きくなって、とうとう「おれは『暗闇』を喰った」と言う者が現れた。

「やぁそれは大きい」と皆が降参し、これにて決着と思ったその時、寺の和尚がこう言った、

「そういうおまえをワシヤ喰った」

これは昔、私が小学生の時に図書室で読んだ小噺のさげの一言です。この和尚はただのまぜっ返しジジイとも取れますが、私には人の思念がもつ壮大さと肉体の物質的な矮小さを同時に言い得た哲学的示唆のように感じたものでした。

「人間死ねば糞袋」とも言います。そういった死生観、“人類は小さな球の上で”、“空気の底”にへばりついて、宇宙138億年の一刹那だけ現れて消えるだけの存在でしかないという中二病的世界観が、私の制作の根底に脈づいていることは否めません。

小噺では、無限の「概念」で無双を誇った男が「肉の塊」として和尚に喰われてしまうというオチになっていますが、それさえも和尚の"ホラ話"でしかなく、そしてさらに、それ自体が創作された"小噺"であるという、入れ子のような三段オチになっているのがなんとも粹に感じます。

ウワガキシリーズは、他人の展覧会DMや名画のポストカードなどに直接加筆して「グチック」に描き変えてしまうという非道なまぜっ返し的手法によってできた作品群です。ポストカードに元々描かれていた作品は、鑑賞者としての私にとってはリスペクトであり、作品自体が素晴らしく、個人的に大好きなものもあります。しかし同時に、ウワガキを施す私にとってはただのグチックの一部、肉の断片にしか見えていません。もとに何が描かれてあったのか、何を語ろうとしていたのか、意匠に込められた諸々の思念や主張は無効化され、ただの"絵に描いた餅"であるという事実が、絵具を載せることで容易に描き変えられてしまうというプラグマティックなオチに収束します。そしてさらには、描かれた「グチック」自体、所詮支持体にへばりついた絵具でしかなく、"絵に描いた餅"=イメージでしかありません。しかしそのイメージが、観る者をちょっと気恥ずかしくさせたり、妙な背徳感を伴いつつ視線を釘付けにしてしまう、憎らしくて愛おしいラスポスの本体でもあります。

今回出品の名画ウワガキシリーズでは、いよいよ元になる名画の「実寸模写」に手を出してしまいました。今まで散々、人が丹精込めて描いた絵を(印刷の上とはいえ)弄んできたツケが回ってきたようにも思います。過去の巨匠たちが描いてきた名画を寸分まで凝視して模写をすることは、描画スキルにおいて勉強になったものの、とにかく面倒な作業でした。そうして苦労して描いた立派な人物画を自分の手で潰して描きかえてしまうのはたしかに勿体ないものでしたが、その背徳感とスリルはどこか病みつきになる毒饅頭のごときものでもありました。加えて永年ウワガキ加害者だった私は、今回半分だけウワガキ被害者の側にも立ったことで、勝手に裸を済ませたような気分になっています。

次の制作のことを考えると、もう本物の作品そのものにウワガキしてしまうという手段しか残されていないような気がしてきて、ハッと我に返り、踏みとどまっている現状があります(嘘です)。

今回の展示では、そのウワガキの集大成に加え、本来の代表的シリーズ、線のドローイング映像作品Unlimited Drawingと、描き変わっていくカタチを合成加筆して現れてきたchimeraドローイング(初出)も出品します。

どちらのシリーズも、描く行為と描かれたイメージが入れ子に反転しながら見えてきますが、そんなことは横において、それぞれの画面に現れてきた「グチック」が放つ、切実で珍奇なリアリティを楽しんでもらえたらと思っています。

山岡敏明

山岡敏明

<https://gutic.com>

1972 大阪生まれ
1995 東京造形大学 卒業

Selected Exhibition

- 2023 「UNLOGICAL 07」(MONO.LOGUES / 東京)
2021 個展「GUTIC_paranoiac paradigm」(2kw gallery / 滋賀)
2019 個展「STREET GUTIC STUDIO」(STREET GALLERY / 神戸)
「あざみ野コンテンポラリーvol.10 しかくのなかのリアリティ」(横浜市民ギャラリーあざみ野 / 横浜)
「THE EMBODIED MIND」(2kw gallery / 滋賀)
2017 個展「GUTIC STUDY」(ギャラリー・ハシモト / 東京)
個展「GUTIC i was born」(Gallery PARC / 京都)
「Lights and Lines」(ギャラリー・ハシモト / 東京)
2016 個展「グチック形態学_収斂進化」(ギャラリー・ハシモト / 東京)
個展「ꄀ+S」(STREET GALLERY / 神戸)
2015 個展「TRANSGUTIC」(ART SPASE ZERO-ONE / 大阪)
個展「TRANSGUTIC side:B」(BAR KITTY / 大阪)
「Living Room」(ギャラリー・ハシモト / 東京)
2014 個展「Phangutic」(GLANFABRIQUE la galerie / 大阪)
個展「GUTIC MORPHOLOGY」(ギャラリー・ハシモト / 東京)
「on paper」(ギャラリー・ハシモト / 東京)
2013 個展「GUTIC MORPHOLOGY」(a-room / 京都)
個展「GUTIC MERISTEM」(Gallery PARC / 京都)
「高尾小フェス」(旧高尾小学校 / 京都)
2012 「アートプログラム青梅- 存在を超えて」(BOX KI-O-KU / 東京)
2011 個展「GUTIC STUDY」(Gallery PARC / 京都)
2010 個展「GUTIC STUDY」(studio90 / 京都)
「not easily seen」(此花メチア / 大阪)
「丹波国分寺跡アートスケープ」(丹波国分寺跡 / 京都)
2009 「Mirage」(同志社大学 / 京都)
「TRANSMUTATION」(東京造形大学附属美術館 / 東京)
2008 「うちゅうのたまご」(Pia NPOビル / 大阪)
2005 個展「GUTIC STUDY X」(STREET GALLERY / 神戸)

Event and Workshop

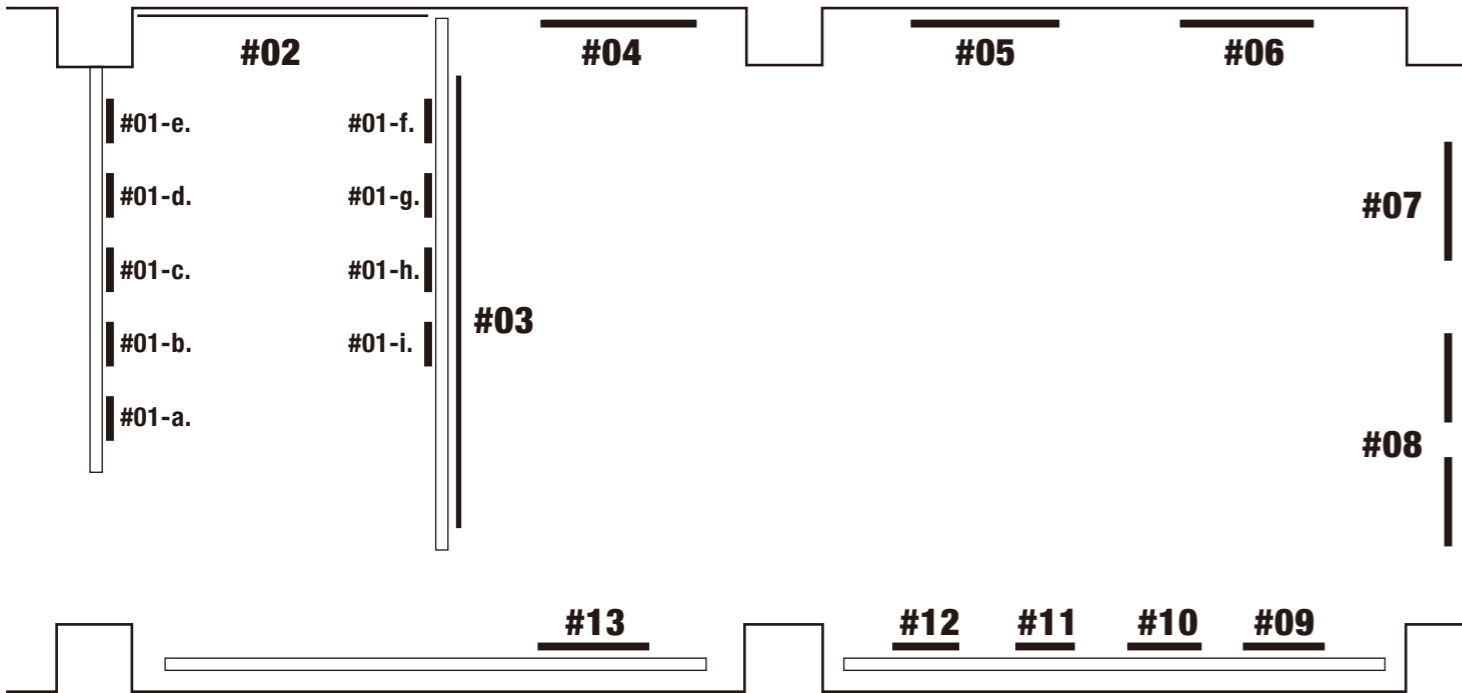
- 2019 「ヒトコマバルク」(Gallery PARC / 京都)
2008 W.S.「アーティスト@夏休みの病院」(大阪市立大学附属病院 / 大阪)

「そういういうを
おまえを
ワシヤ喰ったよ」
“I have eaten such you.”

山岡敏明
yamaoka toshiaki exhibition

2024.7.27 sat. — 8.18 sun.

ギャラリー・パルク
G a l l e r y P A R C



山岡敏明(やまおか・としあき／大阪・1972～)は、2003年より現在まで一貫して「GUTIC STUDY(グチック考)」とする制作・発表に取り組んでいます。山岡は「世界の現実とは、今この瞬間において、すべての『別の状態であった可能性』を排除した唯一の事実であるとともに、無数の可能性のうちの一つの結果にすぎない」として、この思考から「形象=フォルム」の可能性に着目し、平面上に「ありえたかもしれないカタチの可能性を探す」ための思索と行為を展開させています。「GUTIC(グチック)」とは山岡によって描き出された「ありそうながらも何であるとは判じ難い、ある種の形象やフォルム」に対する呼称として作家が創作した造語です。

この「GUTIC」への探究・模索はこれまでキャンバス、ユポ紙、錯視、立体造形や映像などの様々な支持体・方法によって表出されてきましたが、中でも特徴的なものとして「ウワガキシリーズ」[#03]と呼ばれる一群があります。これは山岡が収集した展覧会DMやチラシ、名画のポストカードなどに掲載されている他人の作品画像に直接加筆することで、そこにGUTIC(フォルム)を見出すものであり、他者(の表現)において完成(とされる)イメージを出発点に、そこに山岡が勝手にGUTICを発見し、描き出したものです。

本展に出品されている(山岡によってウワガキされた)作品の出発点となるのは、過去の西洋絵画の巨匠たちが描いてきた人物画になります。ルネサンス期の巨匠アルブレヒト・デューラーが1526年に完成させたとされる《四人の使徒》[#08]、1647～51年頃にディエゴ・ベラスケスによって描かれた《鏡のヴィーナス》[#04]、フランス新古典主義の画家ドミニク・アングルが1820年からおよそ30年をかけて描いた《泉》[#09]、ギュスターヴ・クールベが1843～45年に描いた《絶望》[#12]、エドゥアール・マネによる《オランピア》[#05]など、その多くはいわゆる「名画」と呼ばれるものであり、それぞれの絵描きにとって「これ以上加筆する余地のない完成形」とも呼べる作品の数々です。(オリジナルの作品はキャプションや配布資料にあるQRコードから参照いただけます。)

作品制作にあたって山岡はまずこれら名画を「実寸模写」することから始めました。実物と同サイズにキャンバスをつくり、構図や筆致を緻密に・忠実に模写していく作業は、およそ1年以上の長い時間と苦労の積み重ねによるものであり、その結果としてとても高いクオリティによる模写が完成したといえます。次に山岡はこれらの名画の中にいつものようにグチックを探し、ウワガキをはじめました。そのウワガキは元絵の色面や線を頼りにフォルムを探し、カタチや色を援用しながら奥行きや立体感を表出させるとともに、それ以外の部分は白で塗り潰されることでやがてGUTIC(グチック)が画面に召喚されます。

本展タイトル「**そういうおまえをワジャ喰った:I have eaten such you.**」は、いわば「完成形」とも呼べる巨匠の名画の数々に対し、山岡が「いやいや、そこにはまだまだGUTIC(カタチの可能性)が」とのたまってウワガキをしていく様ようであり、「壮大な自作自演」あるいは「オオボラフキ」の独り言と聞こえるかもしれません。しかし、山岡に導かれて現れ出たるGUTICは、線や色にオリジナルの名残を持ちながらも、これまでに見たことのないような特異なフォルムを持ち、しかしどこか生き物のような道理や必然を感じさせてしまうような、つまり「GUTIC(グチック)」と呼ぶしかない存在として現れます。

ギャラリー・パルクでは、2011年の「GUTIC STUDY」、2013年の「GUTIC MERISTEM」、2017の「GUTIC i was born」以来、4度目となる本展では、この「ウワガキシリーズ」の最新作にして集大成とも呼べる《Series MUP》作品10点とともに、線のドロ잉による映像作品《GUTIC MORPHOLOGY P36》や、描き変わっていくカタチを合成加筆したドロ잉《GUTIC chimera 06》[#01]を展示いたします。目の前にいるGUTICを起点に、元(かつて)のカタチを想像してみたり、ここから先の「ありえたかもしれないカタチ」を探したりしていただければ幸いです。

#01 GUTIC chimera 06

2024
アルシュ紙にインクジェット、顔料インク、額装
37.5 × 28.4 cm

- 01-a. GUTIC chimera 06-016
- 01-b. GUTIC chimera 06-005
- 01-c. GUTIC chimera 06-006
- 01-d. GUTIC chimera 06-002
- 01-e. GUTIC chimera 06-011
- 01-f. GUTIC chimera 06-009
- 01-g. GUTIC chimera 06-008
- 01-h. GUTIC chimera 06-013
- 01-i. GUTIC chimera 06-014

#02 GUTIC MORPHOLOGY P36

2021 HD Video 44:20


#03 UWAGAKI series

2014～
ポストカード、フライヤー、写真印刷などにアクリル絵の具で上書き

[以下のQRコードより、模写の対象となったオリジナル作品を参照いただけます。]

#04 Series MUP on Venus del espejo


2024 パネルに綿布、油彩 175 × 122.5 cm



ディエゴ・ベラスケス(1599～1660)
Venus del espejo
鏡のヴィーナス
1647～1651頃 カンヴァスに油彩 122×177 cm
ナショナルギャラリー(イギリス)所蔵

#05 Series MUP on Olympia


2024 パネルに綿布、油彩 190 × 130 cm



エドゥアール・マネ(1832～1883)
Olympia
オランピア
1863 カンヴァスに油彩 130×190 cm
オルセー美術館(フランス)所蔵

#06 Series MUP on Lady Godiva


2024 パネルに綿布、油彩 183 × 142 cm



ジョン・コリア(1850～1934)
Lady Godiva
ゴダイヴァ夫人
1897 カンヴァスに油彩 142×183 cm
ハーバート美術博物館(イギリス)所蔵

#07 Series MUP on Danaë


2024 パネルに綿布、油彩 172 × 120 cm



ティツィアーノ・ヴェチェッリオ(1490頃～1576)
Danaë
ダナエ
1545～1546頃 カンヴァスに油彩 120×172 cm
カポディモンテ美術館(イタリア)所蔵

#08 Series MUP on Die vier Apostel


2024 パネルに綿布、油彩 215 × 76 cm × 2



アルブレヒト・デューラー(1471～1528)
Die vier Apostel
四人の使徒
1526 板に油彩 204×74 cm ×2
アルテ・ピナコテーク(ドイツ)所蔵

#09 Series MUP on La Source


2024 パネルに綿布、油彩 163 × 80 cm



ジャン・オーギュスト・ドミニク・アングル(1780～1867)
La Source
泉
1856 カンヴァスに油彩 163×80 cm
オルセー美術館(フランス)所蔵

#10 Series MUP on Maternité


2024 パネルに綿布、油彩 97 × 71 cm



バプロ・ピカソ(1881～1973)
Maternité
母と子
1921 カンヴァスに油彩 97×71 cm
個人蔵

#11 Series MUP on Les Joueurs de cartes


2024 パネルに綿布、油彩 73 × 60 cm



ポール・セザンヌ(1839～1906)
Les Joueurs de cartes
カード遊びをする人々
1892～1895 カンヴァスに油彩 60×73 cm
オルセー美術館(フランス)所蔵

#12 Series MUP on Le Désespéré


2024 パネルに綿布、油彩 54 × 44 cm



ギュスターヴ・クールベ(1819～1877)
Le Désespéré
絶望
1843～1845 カンヴァスに油彩 45×54 cm
個人蔵

#13 Series MUP on Madona del Granduque

2024 パネルに綿布、油彩 84.4 × 55.9 cm



ラファエロ・サンツィオ(1819～1877)
Madona del Granduque
大公の聖母
1505～1506 板に油彩 84.4 × 55.9 cm
パラティーナ美術館(イタリア)所蔵